

(対象事業：地域連携事業)

事業名：史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業

事業者名：史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会

連携事業館名等：埼玉県立歴史資料館・比企地区文化財振興協議会・比企社会科研究会・
埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・埼玉考古学会
・中世を歩く会

住所：埼玉県比企郡嵐山町菅谷 7 5 7

TEL：0493-62-5652

FAX：0493-61-1060

HPアドレス：<http://ksky.ne.jp/~rekishi/>

①施設概要

埼玉県立歴史資料館は、国指定史跡「菅谷館跡」に立地し、昭和51年に開館した。展示室は、翌年オープンし、武士の暮らし、中世の城跡、昔の生活道具、比企地域の文化財について学習できる。また、中世に関する様々な調査を行い、その成果を報告書として刊行してきた。平成11年度からは学校向けの体験学習や調べ学習に積極的に対応できるよう窓口を設置している。

②事業の意図目的

埼玉県には菅谷館跡や埼玉古墳群など各時代を代表する史跡が残されている。従来、史跡の活用については「整備」や「保存管理」などのハード面に重点が置かれてきたが、今後はソフト事業充実の必要性が高くなっている。

本事業は、地域の文化財担当者による協議会、地域の教職員の研究会、史跡を管理する県立館、県内に所在する学会などと連携して、地域に根ざした史跡を活用した新しい博物館活動を目的として実施した。

③事業概要

本年度は、埼玉県立歴史資料館が管理する菅谷館跡を含めた、比企地域に数多く所在する城館跡の活用を目的として、次の二つの事業を開催した。

(1) シンポジウムの開催

埼玉県内には多くの城館跡があり、保存されている。概して、それらの城館跡は自治体の象徴として扱われ、自治体のなかで完結する形で活用が図られてきた。その自治体枠を超えて地域の中で広く活用するために、城館跡の歴史的意義付けと新たな活用法について、自治体職員や研究者、地域住民を交えたシンポジウムを開催した。

(2) キットの製作

史跡を積極的に活用するために、遊び感覚で「中世」体験をしてもらうためにキットを製作し、企画展示及び展示室探検などの事業で活用した。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物

- ・中世にタイムスリップ「市場」キット
- ・中世の遊び「盤双六」キット、解説シート
- ・中世のお城ペーパークラフト
- ・シンポジウムチラシ、ポスター

作成した報告書等

- ・シンポジウム「埼玉の戦国時代」資料集

⑤参加者状況

参加者人数 延べ		1, 142人
内 訳 (1) シンポジウム	1, 027人	(参加者は20代から80代と幅広く、中でも50代～60代が多い)
(2) 史跡見学会	73人	(大人を主体)
(3) 展示室探検	42人	(小学生主体)

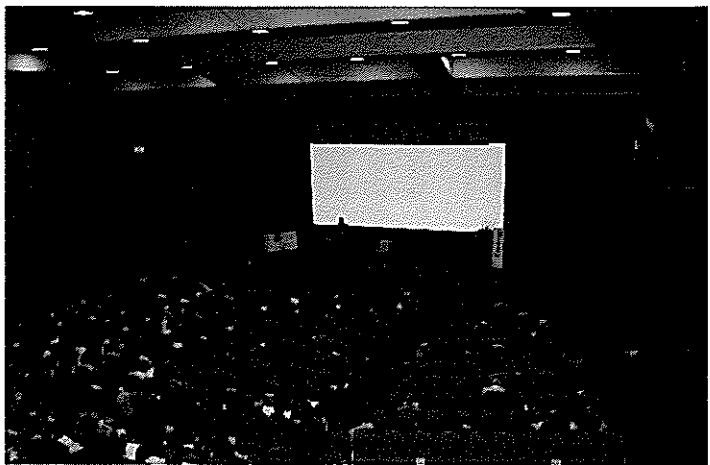
(1) 事業の実施状況について

実行委員会の中心を担う歴史資料館は、国指定史跡「菅谷館跡」にあり、さらに周辺地域には多くの中世城館跡が点在する。なかには地域で積極的な保存活動が行われているものもあるが、多くは十分な学術的評価がなされず、生涯学習や学校教育の中においても適切に活かされていない状況がある。そこで、この事業を通して地域の城館跡に学術的な評価を下すとともに、地域住民にそれらの城館跡を広く理解していただくことを目的とした。

① シンポジウムの開催

独立行政法人国立女性教育会館を会場としてシンポジウムを開催した。

埼玉県内には、これまでに100ヶ所あまりの戦国時代の城館跡が確認されている。その中でも歴史資料館のある比企地域にはそれらの城館跡が集中することが知られているが、築城された年代、その背景などについては不明な点が多い。しかし、最近、吉見町松山城跡・嵐山町杉山城跡・玉川村小倉城跡では、発掘調査が行われ、次第にその実態がわかり始めた。そこで、これらの県指定史跡の調査成果を核として、その実態解明を主目的としたシンポジウムを開催した。



シンポジウム開催会場

シンポジウムの発表者は、県内外の研究者および比企管内の自治体職員により構成されており、数度にわたる準備会、現地見学会などを経てシンポジウムに臨んだ。シンポジウム参加者は研究者よりも一般市民が多かったが、二日間にわたり熱心に参加いただいた。

シンポジウムの広報用のポスター、リーフレットを作成し、広報活動を積極的に行った。また、商業雑誌などにも積極的に開催のPRを行ったことも、多くの参加者を得た理由の一つと考えた。

② 史跡見学会

シンポジウム開催直前に関連する自治体と、城跡の見学会を開催した。対象とした文化財は、嵐山町所在国指定史跡「菅谷館跡」・県指定史跡「杉山城跡」、玉川村所在県指定史跡「小倉



史跡見学会風景

城跡」である。史跡に関する意識の高揚とシンポジウムに関する予備知識を得る機会の提供を目的とした。

史跡の説明は、菅谷館跡を歴史資料館職員、杉山城を嵐山町職員、小倉城を玉川村職員がそれぞれ担当した。菅谷館跡の見学は、本事業の関連事業として県立歴史資料館が実施した企画展「埼玉の戦国時代 城」を主体に行った。

③ 展示室探検

史跡を積極的に活用するために、子ども向けの解説を行い、合わせて遊び感覚で「中世」体験をしてもらうために次のキットを製作し企画展示室で活用した。

- ・中世にタイムスリップ「市場」キット

「中世の市場」で扱われていた品物と銭貨のレプリカ、当時の物価一覧パネル、室町期の庶民の衣装を使って、展示室内の体験型クイズ、中世のお店屋さんごっこ、中世の衣装着用体験などを行った。

- ・中世の遊び「盤双六」キット

「盤双六」キットを使って、本双六・つみかえ・追い回しなど、難易度の異なる遊び方で体験を実施した。

- ・中世のお城ペーパークラフ

「菅谷館跡」ペーパークラフトは来館者に配布して活用を図った。



展示室探検実施風景

(2) 地域との連携について

事業推進の主体となった団体の一つに比企地区文化財振興協議会がある。比企地区文化財振興協議会は、比企管内の自治体の文化財担当職員により構成される組織で、各自治体とも複数の職員の参加があり、シンポジウムの際の受付、会場整理、駐車場整理、案内など運営の中核を担った。

「中世を歩く会・埼玉考古学会」などの民間の研究団体、日ごろから歴史資料館を中心にボランティア活動を行っている高校生や郷土史グループなどもシンポジウム当日には、ボランティアとして運営に協力を頂いた。



ボランティア活動風景

シンポジウムに先駆けて実施した史跡見学会は、本事業と嵐山町・玉川村との共催事

業として、本事業で一台のバスを準備し、残り二台のバスを嵐山町・玉川村の行政バスを利用して3コースで実施した。

(3) 成果物について

① シンポジウム資料集

資料集は、シンポジウム発表者と県内市町村文化財担当者、県内外の研究者の協力により作成された。資料集の構成は、比企郡内に所在する主要城館跡の概説、県内外の戦国時代における様々な問題点に関する論考、県内主要城館跡の概説など多岐に亘り、その内容は現在の学会の水準に達するものと自負する。シンポジウム終了後も、資料集に関する問い合わせが全国から寄せられた。

② 中世に関わる様々なキット類

・「中世の市場」キットは、銭貨のレプリカ、中世の衣装などである。これらのキットは当館の事業に活用するとともに、学校などの事業に貸出すことも行う予定である。

・「中世の遊び」キットは、参加者の年齢に対応した遊び方ができるキットであり、子ども、大人を問わず好評であった。なお解説シートは、持ち帰って遊べるように、盤と駒、遊び方を印刷したもので、体験学習で得たことをその後も活用できるように工夫した。

・「菅谷館跡ペーパークラフト」は、当館の所在する史跡「菅谷館跡」を題材にすることで、菅谷館跡の理解を深めることを目的とした。合わせて低学年にも親しみやすいものとなるように中世の人びとの着せ替え人形を付け加えてた。

(4) 参加者の反応

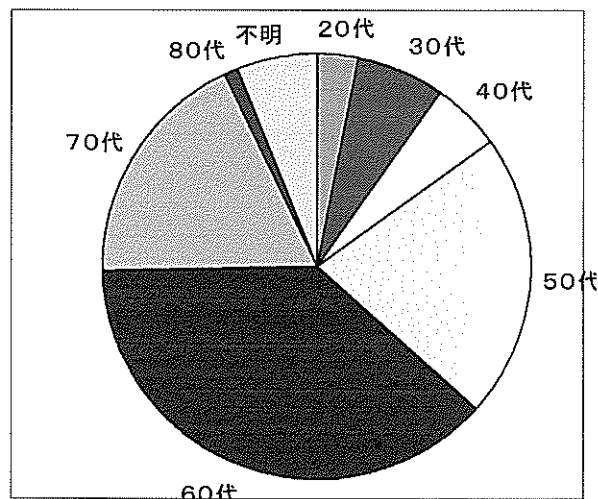
① シンポジウム「埼玉の戦国時代 検証 比企の城」

参加者 1,027人(1日目 531人、2日目 496人)

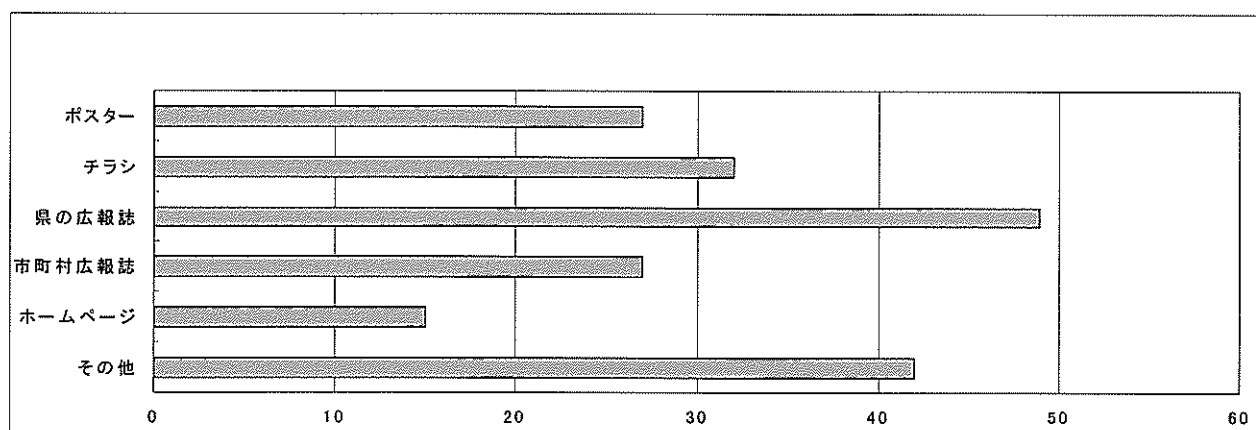
定員を超える参加申込を受け、テーマに対する関心の高さがわかる。これはアンケートの結果にも出ており、郷土の歴史に対する関心が非常に高いことが再認識された。

参加者は20代から80代まで幅広く、なかでも50代から60代の参加者が多い。参加者を都道府県別にみると最も多いのは、

埼玉県内で全体の80パーセント近くで、次いで東京都とが8パーセントを数えた。北は山形、福島、新潟県、西は京都府、滋賀県などからの参加者もあった。県内では、歴史資料館の所在する比企郡市域が最も多く40パーセント近くを占めた。次いで入間郡市域が23パーセント、北足立郡市域が19パーセントを占めた。



年代別参加者



シンポジウム開催を知った媒体

事業の情報源は何かとのアンケートでは、県内参加者の多くは自治体広報誌が多い。県外者は、歴史や考古学の雑誌など、歴史資料館のホームページなどを見ての参加者が多い。ポスター、チラシの広報も一定の効果を上げたと思われるが、費用対効果と言う点では、自治体広報誌などに比較すると高いとは言えない。

参加の動機についてであるが、郷土史に興味がある方々が主体であった。また、「このような学習の場を求めている」との意見が一定数あったことは意義深いことであった。

② 史跡見学会

いずれのバスの参加者も、三つの城を同時に見学できたことに加えて専門職員による説明もあり好評を博した。見学会参加者の大半は、翌週のシンポジウムにも参加いただき、シンポジウムの理解に役に立ったとの意見が寄せられた。

関連事業として歴史資料館が実施した企画展「埼玉の戦国時代」と併せて、実物資料を扱った学習の場に対する関心の高さを知ることができた。

③ 展示室探検

展示室探検では年齢を問わない参加がみられ、「体験」に対する興味・関心が高いことがわかる。特に衣装の着用体験では、継続的な実施を希望する声もあった。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

シンポジウムに関しては、テーマを変えながら今後も実施して欲しいとの意見が多く寄せられた。様々な学術分野における研究会成果の公開の場である学会や研究会は、一般の方々には情報も入らなく、参加の機会も少ない。そのようななかで、一般の方々への学術情報の発信基地として、公立博物館の役割は一層重要なものと再認識できた。

当館と地元自治体との連携により、スムーズに事業が進められた。取り分け、市町村合併が進められている現在、この事業を通して文化財関係職員間の交流も図ることができたことは、大きな成果であった。